

地球環境と海洋化学

藤永 太一郎*

昨夏ブラジルでアース・サミットが催され、筆者も京都フォーラムとサミットニュースを通して「環境化学の基礎」について考え方を提起した。言うまでもない事であるが地球規模での環境が本格的に論じられるようになったのは未だ数年前からのことである。従って極く少数の地球科学者以外には基礎知識が乏しくて本当の理解ができない人が多い。従って、これまで環境問題の多くがそうであった様に加害者と被害者の論争の形になり、地球環境科学も学問になり得ないでいる。

当海洋科学研究所は今年創立48年を迎える。石橋先生の海洋科学研究創始から優に半世紀を越える経験と業績の積み重ねが存在し、その周辺には数百人の世界に数少ない地球環境科学研究者集団が育っていると言うことである。われわれのなかから地球環境科学における指導的概念が生まれて少しもおかしくない、その自負と努力が欲しいと思うのである。

幸いに、具体的には幾つかの萌芽がみられる。1、2の例を上げると、数年前から続けている硫化水素による還元縮合重合反応によって海洋中で無生物的に生命起源物質が生成する可能性を示唆する研究は発表以来大きな関心を持たれており、国際海洋学会での発表後は英独など各地で追試研究が行われ、近く次第に反響が表れることになっている。また今年研究所としては始めて国からの委託研究を受け、立派に完了して報告した。それは環境庁からの「気泡平衡法による海洋溶存二酸化炭素試験計測」

についての委託であったが、日韓フェリーに設置した装置は始めて神戸・釜山間の2往復について信頼できる溶存二酸化炭素の自動計測に成功した。これは一つに新しい気水間ガス平衡装置の開発成功に基づいており、その詳細は成果と共に何れ後日報告の予定である。この他、新しい微量の鉄の定量装置を開発し、タスマン海などを航海測定する研究に協力するなど、海洋における栄養塩の循環機構に関する知見についても幅広く関与してきている。なお、四年前日産科学振興財団の助成の下で当研究所が主宰した「環境分析と新探知器国際会議 SMEC (京都)」は大きな成果を収め、以来再度開催が望ましいとの要望が欧米亜の各国から叫ばれているので検討中である。

以上のように国内外から多くの要望と期待が寄せられている現状は誠に喜ばしい事であるので、研究所の一層の基盤の強化と発展を目指して去年来理事会において機構の改革を議論してきたところ此度、海洋及び機器業界から得難い立派な理事長及び理事を迎えると共に学会からも複数の理事の新任を頂く事ができた。筆者は研究所長・理事として研究と研究経営に専念する決心をした、ここに改めて大方の一層の御鞭撻を希う次第である。

* (財) 海洋化学研究所 研究所長